

## 「歌いかけ」と「読み聞かせ」 実践への心理学からのアプローチ

日本公文教育研究会乳幼児普及推進部  
共同研究チーム リーダー

佐々木丈夫 (ささき たけお)

公文教育研究会は1958年の創立以来、家庭教育の立場から、子どもたちの可能性を発見しその能力を最大限に伸ばすことを教育本来の目的と考え、進学塾などの受験指導主体の教育産業とは一線を画した教育活動を展開してきました。公文システムの根幹は、読み・書き・計算能力を養成する教材の学習となります。その教材学習を成立させるための基盤づくりとして、家庭での歌いかけ・読み聞かせと、それに続く読書が大きな意味を持つことを経験的に見出し、30年以上にわたってその実践を推奨してまいりました。

特に「家庭での歌いかけ・読み聞かせ」については、家庭教育の最も重要な出発点としての位置づけから「生まれたらただちに歌を聞かせましょう」「歌二百 読み聞かせ一万(回) 賢い子」という標語による啓蒙活動や、様々な社会的実践活動を継続してきた歴史があります。しかし、その実践的な価値は経験的に深くわかってはいたものの、それがどのように養育者と乳幼児の相互行為や言語・コミュニケーション・情動調整力・言語リテラシーなどの諸能力の発達に寄与し、将来の高度な学習を支える基盤となるのかは解明できておりませんでした。

そこで、これらのことを明らかにするために白百合女子大学・田島信元先生にお願いし、2006年より「子育ての科学共同研究班」

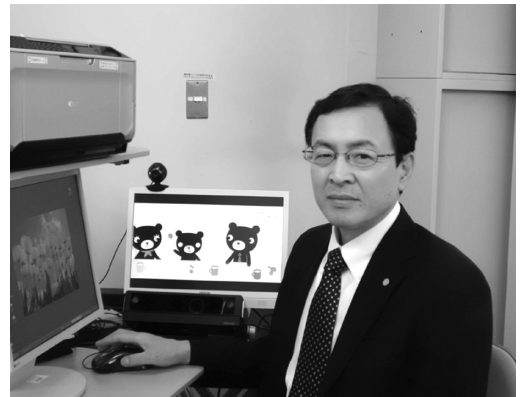
を組織し、発達心理学と脳科学から「歌いかけ・読み聞かせ」の効果を研究することに致しました。メンバーは他に白百合女子大学・宮下孝広先生、東京医科歯科大学・秦羅雅登先生、京都大学・中村克樹先生、昭和女子大学・中村徳子先生をお願いしました。

脳科学からのアプローチでは、母親の歌いかけや読み聞かせによって子どもの大脳辺縁系が強く活動すること、また心理学からのアプローチでは、歌いかけや読み聞かせにおいて、母子の相互作用に大きく五つのステップがあることを見出すことができました。またこの研究過程で特に大きく浮かび上がってきたのは「歌いかけ」の持つ力と意義の重要性です。

日本公文教育研究会では、社会貢献事業の一つとして、2007年度から主に0～3歳児の親子を対象に家庭内で利用できる童謡のCDや絵本のパックを無料で提供し、家庭での働きかけの方法についての3回の面談を基本としたアドバイスを実施する「こそだてちえぶくろ」活動を開始、2012年6月現在15万組の親子にこのサービスを提供してきました。その追跡調査の結果から、「読み聞

Profile — 佐々木丈夫

早稲田大学第一文学部社会学科卒業後、(株)公文教育研究会入社。東京外国語大学民間等共同研究員、RISTEX 研究協力員を歴任し、2008年より白百合女子大学生涯発達研究教育センター特別研究員を兼任。



読み聞かせ時の視線についても調べています

かせ」が親子の情緒的な交流よりは物事を知るきっかけとその手段としての役割が強く期待されるように変化していくのに対し、「歌いかけ」は養育者の子どもとの交流に強く結びつき、情動調整機能の獲得を通して社会性を発展させる役割を果たしている傾向を確認することができました。これらの研究実績をベースとして、0～2歳向けの“Baby Kumon”という新たな教育サービスの提供もスタートすることができました。

教育の現場ではなによりも実践が重視されます。しかし実践だけでは変化を続ける社会と子どもたちには対応しきれない面があります。そこに「学」の必要性があらわれます。特に心理学は、教育実践を進化・深化させるために欠くことができない「学」の一つです。